

最期まで「私」らしく生きたい ～認知症の人と家族への援助を すすめる第 41 回全国研究集会 in 北海道～

公益社団法人 認知症の人と家族の会

〒602-8222 京都府京都市上京区晴明町 811-3 岡部ビル 2F

助成事業の概要

認知症の人と家族への援助をすすめる全国研究集会は、1985 年から毎年継続して開催している、認知症分野における歴史ある全国規模の研究集会です。

認知症に関する先駆的な実践や最新医療の講演に加え、地域で認知症と共に生きるためのまちづくりをテーマとしたシンポジウムや実践発表等を柱とし、全国各地で持ち回り開催してきました。

本年度は北海道札幌市において、「最期まで『私』らしく生きたい」をテーマに、会場参加とオンラインを併用したハイブリッド形式で実施し、当事者・家族・専門職等が広く参加しました。

対面とオンライン双方の参加機会を設けたことで、遠隔地からの参加も可能となり、幅広い層への普及啓発にもつながりました。

人生 100 年時代を迎え、認知症になっても安心して尊厳と希望をもって暮らせる社会の実現が求められる中、本研究集会では、医療・介護・暮らし・意思決定・家族支援の在り方について関係者と共に考え、当会の理念である「認知症になっても安心して暮らせる社会の実現」に向けた理解を深める機会としました。

事業の成果

本研究集会は、「最期まで『私』らしく生きたい」をテーマに、北海道札幌市においてハイブリッド形式で開催し、全国から計 650 名が参加しました。

認知症当事者、家族、医療・介護・福祉の専門職、地域で支援に携わる関係者など、多様な立場の参加者が一堂に会し、認知症になっても尊厳と希望をもって暮らし続けるための理解を深める貴重な機会となりました。また、対面だけでなくオンラインの参加機会を設けたことで、遠隔地からの参加も可能となり、幅広い層への普及啓発につながりました。

基調講演では、人生の後半をどのように生きるかという視点と、医療・支援の現場から認知症の人を支える際に大切にすべき関わり方について、二名の講師がそれぞれの経験を踏まえて講演しました。

平均寿命と健康寿命の差に着目し、転倒や感染症が生活機能低下の要因となること、本人・家族が事前に意思表示や話し合いを行う重要性が具体例とともに示されました。また、症状のみで判断せず、その人の生活歴や思いを尊重し、本人の声を聴くことが支援の質を高めること、家族や支援者が孤立しないための地域連携の必要性が強調されました。

これらの講演を通じて、認知症になっても自分らしく生きるための備えと支援の在り方について、参加者の理解が一層深まりました。

体験・実践発表では、認知症当事者による語りや演奏を通じて、社会参加や役割を持ち続けることが本人の生きがいや前向きな生活につながることを示されました。また、長年の診療経験から早期の心理的支援と家族支援の重要性が共有されました。さらに、在宅介護の体験や地域の空き家を活用した住まいの実践が紹介され、本人と家族

を支える多様な選択肢が示されました。

シンポジウムでは、当事者・家族・支援者・専門職が立場を越えて意見を交わし、「できないこと」ではなく「できること」に目を向け、支え合いながら暮らす日常の大切さが共有されました。

さらに、当事者の発言を中心に据えた構成としたことで、本人主体の支援の重要性への理解が一層促進されました。

本人の思いを尊重し、地域全体で支えることで、認知症になっても最期まで「私」らしく生きられる社会の実現に向けた共通理解が醸成され、本研究集会は共生社会の推進に寄与する大きな成果を上げました。

成果の広報・公表

本事業の成果については、幅広い層に情報が届くよう、多様な媒体を活用して広報・公表を行った。開催にあたっては地元新聞への掲載に加え、SNS (Facebook、X、Instagram、LINE) を活用し、一般市民や当事者、家族、支援者に向けて情報発信を行った。また、医療・介護・福祉分野の専門職向け雑誌への案内掲載や、専門職団体からのメール配信を通じて、専門職への周知を図った。

事業終了後は、基調講演や発表内容をまとめた報告書を作成し、関係団体等へ配付する。

報告書には、基調講演やシンポジウム等の発言内容をすべて書き起こし、使用した資料も掲載し、継続的な学びに資する内容とする予定。さらに、当国会報「ぽ～れば～れ」（14,000 部発行）を通じて、介護家族や関係者に実施内容と成果を広く伝えた。

今後の展開

本研究集会は、1985 年以来、毎年継続して開催してきた当会の中核的な事業であり、第 41 回

まで積み重ねてきた長年の実績を有している。

本研究集会で得られた学びや実践事例を、今後の当会の活動や各地域での取り組みに活かしていく。

基調講演や体験・実践発表を通じて共有された、本人の思いを尊重する支援の視点や、家族が孤立しないための地域連携、当事者や家族同士が支え合うピアサポートの重要性について、会報やウェブサイト、研修会等を通じて継続的に発信する。

なお、次年度は開催を見送るが、2027 年度以降は再び全国研究集会を開催し、全国各地の支部や関係団体、医療・介護・福祉・行政との協働を深めながら、今後も当会の理念である「認知症になっても安心して暮らせる社会の実現」を目指し、共生社会の実現に向けた取り組みを、今後も継続・発展させていく。